二〇一六年九月九日

一斗缶吊るすは谷戸の鳥脅　うつぎ
補聴器のピイピイとなく秋風裡　豆狸
大噴水ミストとなりて消えにけり　ひかり

二〇一六年九月八日

虫の音を聞き分けながら茶をすする　ま　ゆ
葛かずら御廟へつづく築地塀　なつき
灯下親し日記代わりに投句す　明日香
追伸をさらに書き足す秋灯下　たか子
秋の風入れて久々針仕事　こすもす
小鳥来る日中友好誓ふ碑に　菜　々

二〇一六年九月七日

くさぐさの朝露ひかる休耕田　明日香
峡の宿庭下駄露を置きにけり　宏　虎
あぜ豆の花盛りなる散歩道　はく子
夕干潟秋思の吾の影法師　三　刀
海光にカンナの燃ゆる干拓地　よし女
近寄れば大女なる案山子かな　うつぎ

二〇一六年九月六日

川風に吹かれ一服草紅葉　こすもす
秋の雲一筆書のごとかすれ　隆　松
秋の蚊に眉間刺さるる太子堂　なつき

二〇一六年九月五日

カラフルなテープがをどる鳥威　よし女
一掬す名水に秋聞ききにけり　よし女
秋日影濃ゆき白亜の人魚像　なおこ
松手入れ頭上に声の飛び交ひて　ひかり
と見かう見して揺れかはす秋桜　ともえ

二〇一六年九月四日

虹の橋へと機首たてて飛機離陸　さつき
彩雲の褪めゆく湖畔夕涼し　智恵子
デザートはスワンケーキや卓涼し　なおこ
稲穂波をどる田んぼとなりにけり　明日香
澄む水に鯉翻る心字池　泰　山

二〇一六年九月三日

芋の葉を乱れ打ちして通り雨　ま　ゆ
パプリカの赤が主役や夏料理　こすもす
吟行に行ける幸せ秋天下　はく子

毎日句会みのる選・二〇一六年九月一一日